

「は」と「が」の使い分けについて

周 国 龍

要 旨

日本語の「は」と「が」に関する先行研究で理論的な論述は数多くあり、その中で使い分けについての言及も散見される。しかし、日本語学習者にとって「は」と「が」の違いの理解と、その使い分けは実に難しく、さらに考察する必要があると考えられる。

本稿は主に同一表現において「は」と「が」が共に使用可能な場合における意味の違いを複文の場合、対照の場合、文脈による場合、「が」の積極性の場合を分けて考察した。本考察で、その使い分けによる意味の微妙な違いを正確に理解する重要さが改めて認識された。

キーワード：同一表現、使いわけ、文脈、対照、積極性

1. はじめに

日本語の「は」と「が」に関する研究は数多くなされてきた。それに基づいて日本語学習者（以下学習者とする）の「は」と「が」の誤用についての分析がなされたものもある。また、同一表現で「は」と「が」が共に使用できる場合、その違いを指摘した研究もある¹⁾。しかし、学習者にとって一番難しいのは一見「は」と「が」どちらが使用されても文法的だが、実際はその使い分けにより、場面や話し手の意図等が大きく異なった表現になる場合である。それを正確に理解し、使用しなければならない。例えば、

例1：阪神が勝ちましたよ。

例2：阪神は勝ちましたよ。

文脈がなければ、例1と例2両方とも文法的である。しかし、表現の裏には必ず文脈が存在する。実際に使用される場面、或いは会話の背景などといった文脈による制約が働く、それによって、「は」と「が」どちらが使用されるべきかは自ずと決まる。即ち「は」と「が」の使い分けはその文脈で正しく反映されたものでなければならないわけである。学習者は「は」と「が」に関する文法理論を理解するのも重要であろうが、言語環境におけるその使い分けと使

い分けによる意味の微妙な違いを正しく理解することも重要なのである。

本稿は、文法的な制限を受けず、同一表現において「は」と「が」どちらも使用できる場合で、その使い分けに文脈がどのように関わるのか、意味がどのように違うのか、話し手にはどのような表現意図があるのか、聞き手はその使い分けから話し手の意図をどう理解すべきなのか等を考察する。

2. 「は」と「が」について

同一表現で「は」と「が」がどちらも使えるような場合もあれば、どちらかしか使えないような場合もある。どちらも使えるような場合における「は」と「が」の使い分け、そしてその意味の違いを考える前に、まずどちらかしか使用できない主な場合を挙げておく。

2.1. 文法上の制限を受け、「は」しか使えない場合²⁾

例3：あの人は誰ですか。

例4：私の一番好きなスポーツは野球です。

例5：私の祖父は毎日9時に寝て、5時に起きます。

2.2. 文法上の制限を受け、「が」しか使えない場合²⁾

例6：どの人が田中さんですか。

例7：電話のベルが鳴っていますよ。誰か出てください。

例3～例7の場合、文法的制限を受け、「は」を使用すべき表現を「が」に置き換えることもできないし、同じく「が」を使用すべき表現を「は」に置き換えることもできない。

2.3. 意味上の制限を受け、「は」しか使えない場合

例8：彼は成長につれて、たくましい若者になった³⁾。

例9：彼はまだ若いのに、髪が真っ白だ。

2.4. 意味上の制限を受け、「が」しか使えない場合³⁾

例10：雨が降っているのに、傘をささずに出掛けた。

例11：涙が出るほど嬉しい。

例8、例9の「は」しか使用できない複文と、例10、例11の「が」しか使用できない複文は文法的な制限を受けるというよりも意味的に成り立たないと考えたほうが実情に近いと言える。例8、「彼」と「若者」、例9「彼」は「髪」と同一人物でなければならない。従って支配域が従属節内に限定される「が」は不適切になる。例10の従属節の「雨」は主節の「出掛けた」主体の人も、例11の従属節の「涙」も主節の「嬉しい」主体の人になるはずはない。従って、支配域が従属節内に限定させなければならない。このように、文法的制限或いは意味上の制限を受け「は」或いは「が」しか使えない場合がある。

一方、文法的な制限を受けずに同一表現において「は」と「が」がどちらも使用可能な場合

がある。このような時、「は」が使用されるか「が」が使用されるかはその表現における文脈、話し手の意図等によって決められる。言い替えれば「は」が使用されずに、「が」が使用され、或いは「が」が使用されずに、「は」が使用される場合は必ずその表現の背後にある文脈、あるいは話し手の意図が異なってくる。以下のような場合が考えられる。

1) 複文における「は」と「が」

「は」を「が」に、あるいは「が」を「は」にすると、意味が変わる。

例12：あの方が行かなければ、後で困る⁴⁾。

例13：あの方は行かなければ、後で困る。

2) 「が」の表現を「は」にすると、言外の意味を表すことになる場合。

例14：花子さんは目が美しいですね⁵⁾。

例15：花子さんは目は美しいですね。

3) 文法的には「は」も「が」も使用可能であるが、「は」と「が」の選択は文脈による制限を受け、「は」と「が」の使い分けをしなければならない場合がある。言い換えれば、「は」か「が」が使用されることによって、その文脈を推測することもできる。

例1：阪神が勝ちましたよ。

例2：阪神は勝ちましたよ。

4) 「は」と「が」がどちらも使用可能だが、「は」が使用されるのと「が」が使用されるのでは表現の意味はかなり異なる場合がある。このような場合、どちらが用いられるかは話し手の意図による。

例16：私が出勤します。

例17：私は出勤します。

「は」と「が」を1)～4)のように、大きく4つに分けた。どちらも文法的な制限を受けずに使用が可能である。しかし、その使い分けによってニュアンスは大きく異なる。話し手は正確に選択して使用しなければ、誤用による誤解を与えてしまう恐れがあり、また聞き手は正確に理解しなければ誤解をする危険性がある。話し手の正確に選択し使用することと、聞き手の正確に理解することが求められる。「は」と「が」の正しい使い分けをするということは非常に重要なわけである。

3. 「は」と「が」の使い分けについて

以下、上にあげた4つの「は」と「が」の使い分けをそれぞれ考察し、「は」と「が」の使い分けによるニュアンスの違いを考察していく。

3.1. 複文の場合

複文の場合、「が」の及ぼす範囲は従属節内に止まり、「は」は従属節を飛び越えて、主節ま

で係ることができるため、「は」と「が」の使い分けによって意味の違いが生じる。

例18：私が大学に入学したのをよろこんでいる⁶⁾。

例19：私は大学に入学したのをよろこんでいる。

「私が」は「入学した」にしか係ることはできないため、「喜んでいる」のは「私以外の父とか母とか」であり、「私は」は「大学に入学した」を飛び越えて、「よろこんでいる」にまで直接係ることができる。即ち、誰が「よろこんでいる」かは「は」と「が」によってまったく異なることになるわけである。また例18で「大学に入学した」人は「私」しか考えられないが、例19では「私」でも「私」以外の人でも可能性としてある。

次の例も同じである。

例20：父がうるさいので友達できません³⁾。

例21：父はうるさいので友達できません。

例20の「が」の作用域は従属節の「うるさい」まで止まり、それを飛び越えて「友達できません」にまで係ることはできない。従って、「友達できません」人は「父」以外の人となり、この場合は話し手になろう。しかし、例21は「うるさい父は友達ができない」と理解するのが普通であろう。

例22：子供が目を覚ますと歌を歌う³⁾。

例23：子供は目を覚ますと歌を歌う。

例22で歌う人は子供以外の人で例えばお母さんだろうが、例23ではお母さんが目を覚ましたという意味の可能性もあろうが、子供が睡眠の邪魔になるか否かといった識別はできなければ意味的に子供自身が目を覚ましそして歌を歌うことになるだろう。

例12：あの方が行かなければ、後で困る。

例13：あの方は行かなければ、後で困る。

「が」と「は」の違いにより、「後で困る」人は「あの方」以外の誰かから「あの方」に変わり、まったく異なった意味の表現になる。

複文の従属節で「は」と「が」の両方が使用できる場合において、「が」の作用域は従属節内に限られるのに対し、「は」の作用域は従属節を飛び越えて主節まで及ぼす。両者の複文における作用域の差は意味に大きな違いをもたらしたわけである。

複文における「は」と「が」の使い分けは表現の意味に大きく影響していることが明らかであり、その使い分けによる意味の違いを正確に理解しなければならない。

3.2. 「は」が対照になる場合

「は」も「が」も用いられる表現の場合において、通常「が」を用いるべき表現であるにもかかわらず、「が」を使わずに「は」を使った場合、「は」の対照の機能が働き、対照の意味が含有される表現になる場合が多い。また、通常「は」が使用される文でも文脈によっては対照の意味が生じる場合がある。

例14：花子さんは目が美しいですね。

例15：花子さんは目は美しいですね。

例14は花子さんの目が美しく感じることを素直に表現しているが、例15になると、花子さんの目を褒めているように言い表しているが、「は」の使用により、その多くは暗に花子の他に何か対照になるもの、しかもあからさまに言うことのできないマイナス的なものと対照をする言外の意味が含有されることになる。

例24：雨がやんだ。

例25：雨はやんだ。

例24では話し手はただ雨があがったという目の前にある事実を伝えただけだが、例25の場合、雨があがったけれども、例えば、雨と連想されやすい風はまだ強く吹いているといった含意を持たせたりする。このように、通常「が」を使用すべき表現で「が」を使わずに「は」を使用した場合、必ずしもマイナス的な対照になるわけではないが、「は」が用いられる表現に何らかの形で対照機能が働き、言外の意味を持たせていることには変わらない。

例26：学生：私が先に来ましたが、彼は後から来ました。

例27：学生：私は先に来ましたが、彼は後から来ました。

例26では話し手は自分が先に来たことを強調して先生に褒めてもらいたいといった気持ちが込められているであろうが、例27ではただ早く来たのと後から来たのと対照するだけになり、褒めてもらいたいといった気持ちは感じ取られないであろう。このように、「が」が使用される場合に、強調の意味があるのに対し、「は」は対照の機能が働き、表現は対照の意味に変わる。

例28：私は学生です。

例29：私は学生ですが、彼は会社員です。

例28では、特に対照の意味は感じ取られないであろうが、例29のような文脈の中にあれば、対照の意味を自ずと帯びてくる場合がある。

3.3. 文脈による「は」と「が」の使い分け

文脈無しでは、「は」を使っても「が」を使っても文法的な表現になるが、しかし実際の会話になると必ず何らかの形で文脈が形成される。文脈が形成された以上、「は」が用いられるか、「が」が用いられるかは文脈によって決められる。すなわち、文法的な制限は受けない代わりに文脈的な制限を受ける。その時、「は」が用いられるべきか「が」が用いられるべきかは会話の文脈がより重要である。話し手は文脈に合うように「は」と「が」を選択して表現しなければならない。一方、聞き手は話し手の用いられる「は」か「が」から表現の裏にある文脈を理解する必要がある。即ち話し手は文脈を鑑みて「は」と「が」の使い分けをする必要があるし、一方、聞き手も「は」或いは「が」から文脈を汲み取って表現を理解しなければならない。会話を成立させるためには話し手と聞き手は文脈における共通理解が必要となる表現の

場合である。

例30：山田君が入院したよ⁷⁾。

例31：山田君は入院したよ。

例30で山田さんが入院したという情報をまだ知らない人に伝える時、或いはまだ話題になっていない時、話し手は山田さんに言及した時等に用いられるのに対し、例31で「山田さんはい」といった山田さんが既に話題に上った時に用いられる。

例1：阪神が勝ちましたよ。

例2：阪神は勝ちましたよ。

二つの例はともに阪神が優勝したことを聞き手に伝えようとする場合である。話し手は勝手に「は」或いは「が」を使用することはできるわけではなく、この話題に関して聞き手と既に共有したかどうかという文脈にかかっている。もし、既に阪神が優勝できるかどうかについて議論していた等という文脈があるならば、例2となる。しかし、事前に阪神についての議論があったという文脈がなく、話し手はそのニュースを聞いた後聞き手に伝えるといったような場合ならば、例1となる。

このように、話し手と聞き手との間に、既に話題になっていた文脈の有無によって「は」か「が」の使い分けが必要となる。

例32：月が綺麗です⁸⁾。

例33：月は綺麗です。

例32ではある晩、夜空に輝く月を眺めてその澄み切った美しさに感動し、思わず口から出た言葉で、眼前に展開される事実をそのまま口にした表現であるのに対し、例33では月一般について「月というものは綺麗なものだ」という意味合いで言っているものである。

例34：これは駅のコインロッカーの鍵ですよ⁹⁾。

例35：これが駅のコインロッカーの鍵ですよ。

机の上に鍵が一つあって、何の鍵かわからない時に、たまたま話し手はどんな鍵かを知っている場合、例34の「は」が用いられるであろう。一方、たくさんの鍵の中から駅のコインロッカーの鍵を見つけ出そうとしているがどれかわからない人に、話し手はそれを知っていれば例35のように言うであろう。

「は」と「が」どちらも文法的である場合、「は」を使うべきか、「が」を使うべきかは文脈の制限を受け、文脈によって決められる場合、話し手は文脈を鑑みて「は」か「が」かを選択して使用しなければならない。「は」と「が」の使い分けは文脈の制限を受ける場合があるからこそ「は」と「が」どちらが使われるかでその表現からどんな文脈的背景があるかも推測しなければならないわけである。

このように、同一表現において、文法的制限を受けずに、「は」と「が」のどちらも使用可能だが、文脈的な制限を受ける場合、文脈による「は」と「が」の正しい使い分けの重要性を

認識しなければならないわけである。

4. 「が」表現の積極性について

「が」を使用する表現に話し手の積極的な意思表示が認められる場合がある。一方、「は」を使用する表現に他との比較対照等の意味はあるかもしれないが話し手の積極的な意思表示は認められない。これが「は」と「が」のもう一つ大きく異なるところである。

例36：私があなたを支える！¹⁰⁾

例37：私はあなたを支える！

夫が病に倒れて自分の病気に絶望した時に、奥さんは「私があなたを支える！」と「が」を使うことによって、積極的に看病する気持ちを夫に伝えて安心させるという意図が夫に大きく勇気を与えることになるであろう。もし例37のように言ったならば、主に他の人との対照を意識する表現となり、積極的に一方的に支えるという強い意思は見られなくなり、夫への勇気付けの効果は薄くなるであろう。

例38：私が行きます。

例39：私は行きます。

仕事で誰か出張する必要がある、会議で出張者を決める場合、話し手は例38を用いて発言した時、率先して行くという積極的な意思表示になるであろうが、例39だと、他の人はどう応じるかを意識しながらの意思表示になるが、積極的な意思表示とはあまり感じられないであろう。

レストランでバイトをしている二人の内、Aさんは店長に「明日は急用ができたので、休みたい」と申し出たという場面で、Bさんは次のように言ったとする。

例40：私が出勤します。

例41：私は出勤します。

例40の場合、話し手のBさんは出勤日ではなく、店長が人手不足で困るのなら、代わりに出勤するという積極的な意思表示なので、これを聞いた店長はほっとして問題解決に手を貸してくれたBさんに一言感謝の言葉を述べるだろう。一方、例41は例40と対照的に、元々出勤することになっていて、「彼は出勤しないが、わたしは出勤する」という意味を表すだけで、代わりに出勤するよという意思表示にならないため、店長にとっては問題解決に至らず、ありがたみは殆ど感じられないわけである。

このように見てくると、「が」と「は」に含められる意味はまったく異なることが明らかである。「が」には「積極的」という意味が含まれるが故に、例40と例41で話し手が表明しようとする意図は大きく異なるわけである。

次のような極端な場合になれば、「は」と「が」の「積極性」という点における違いはさらに明らかになる。

例42¹¹⁾：「あんたが引き受けんとありゃ、やむをえない。年をとったって、なあに、このくらいの手術はなんでもない。わしがやりますよ。わたしが自分でやりますよ」
のしかかったように院長が言った。そう言ったら「では、わたくしがやります。」と、のっぴきならない答を、彼は期待しているもののよう。

例42のように、医者としての能力に欠ける院長の「わしがやりますよ」を言ったが、本当は自分でやるつもりがなく、部下の医者に、「ではわたくしがやります」と期待している言い方なのである。もし、「わしはやりますよ」と言ったとしたら、どうなるであろうか。部下の医者は「あなたがやらないなら、わしはやりますよ」と対照の意味に解釈し、元々やる気がない医者は益々やる気がなく、院長の意図に反する結果になってしまうであろう。

例43¹²⁾：命を危険にする命令が下り、隊長は自分はやりたくない、でも、命令が出た以上、誰かがやらなければならないという場面で、隊長は部下に向かって言う「お前たち誰もやらないというのなら、俺がやる。お前たち、それでもいいのだな」というような台詞である。これもまた、例42と同じに、「隊長殿、私がやります」を期待している。そうなれば、隊長自身はその仕事から逃れることができる。これも「が」であるから、そうなのであって、これが、もし、「俺がやる」でなくて、「俺やる」ではまずいだろう。「俺はやる」であつたらどうであろうか。その時、答は「隊長殿、私もやります」となる。しかし、これでは、隊長自身もその作戦に参加しなければならない。自分は助かりたいと思う意図に反する結果になる。

隊長は「が」によって積極的に仕事に取り掛かることをアピールすると同時に、「が」によって部下に「私がやる」を言わせようとする意図がある。この意図が実現できれば隊長自身は危険な作戦から逃れる。「は」ではこの意図の実現はできないことが明らかである。

「が」の積極性については以上のような例で考察してきた。話し手はただ積極的にある行為を行うという意思表示の場合もあれば、話し手は「は」と「が」に含められる意味の違いを意図的に使い分けて自分の意思を表明する場合もある。さらに「が」に含まれる積極性の意味を活用してより効果的に相手に働きかける場合もある。「は」と「が」の使い分けの妙意はこのような例でよく表されている。

5. 終わりに

以上、「は」と「が」について、主に複文の場合、対照になる場合、文脈依存の場合、積極性の場合におけるその使い分けと意味の違いを考察してきた。考察した通り同じ表現において、「は」と「が」の使い分けはその意味に大きな違いをもたらす場合がある。そのため「は」と「が」の正確な使用と理解は日本語習得の難関の一つであり、その使い分けの重要さへの注意を改めて喚起する必要があるように思われる。今後も、学習者の視点から「は」と「が」の

使い分けについての更なる研究が必要だと考えられる。

本稿において、複文の場合、対照になる場合、文脈依存の場合、積極性の場合と分けて考察してきたが、視点によっては違った分類をすることも可能であるといった問題が残っている。例を一つあげれば、

例26：私が先に来ましたが、彼は後から来ました。

例27：私は先に来ましたが、彼は後から来ました。

「が」を中心に見るなら、積極性に分類することも考えられるであろう。

「は」と「が」の使い分けに関する研究を深めていくためにはどのような分類がより適切なのかは今後の課題とする。

注

- 1) 詳しくは青木 (1992) 野田 (1996) 山口 (2004) 佐治圭三 (1991) (1992) 鈴木 (1978) を参照されたい。
- 2) 詳しくは野田 (1985) を参照されたい。
- 3) 森田 (2002) p.81
- 4) 佐治 (1991)
- 5) 浅山 (2004) p.202
- 6) 鈴木 (1978) p.16
- 7) 菊地 (1997) p.101
- 8) 鈴木 (1978) p.22
- 9) 金谷 (2002) p.74
- 10) テレビ番組の台詞
- 11) 山口 (2004) p.129
- 12) 山口 (2004) p.130

参考文献

- 青山怜子 1992『現代語助詞「は」の構文論的研究』(笠間叢書249) 笠間書院
 浅山友貴 2004『現代日本語における「は」と「が」の意味と機能』第一書房
 金谷武洋 2002『日本語に主語はいらない 百年の認識を正す』講談社選書
 菊地康人 1997「「が」の用法の概観」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
 佐治圭三 1991『日本語の文法の研究』ひつじ書房
 佐治圭三 1992『日本語の表現の研究』ひつじ書房
 鈴木忍執筆 1978『教師用日本語教育ハンドブック 文法Ⅰ 助詞の諸問題』国際交流基金
 野田尚史 1985『セルフマスターしルーズ1 はとが』くろしお出版
 野田尚史 1996『「は」と「が」』くろしお出版
 野田尚史他 2002『複文と談話』岩波書店
 堀口和吉 1995『「～は～」のはなし』ひつじ書房
 森田良行 2002『日本語文法の発想』ひつじ書房
 山口明穂 2004『日本語の論理』大修館書店